



Title	中世カタロニアの寓話集「獣の書」(試訳)(2)
Author(s)	三原, 幸久
Citation	大阪外国語大学学報. 1979, 44, p. 37-52
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80740
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

中世カタロニアの寓話集「獣の書」

(試訳) (2)

三 原 幸 久 ・ 訳

Traducción Japonesa del "Llibre de les Bèsties", Fabulario Medieval Catalán (2)

por Yukihiisa Mihara

A continuación de la primera parte de mi traducción publicada en el mismo Boletín Núm. 41, este artículo contiene el resto de la traducción del "Llibre de les Bèsties" excepto su último capítulo.

「陛下」と雄牛は言った。

〔挿話16〕

「さて昔、熊と鳥と人間と蛇が穀物を貯蔵する穴の中へ落ちました。その穴の近くを聖なる隠者が通りかかって、その穴に目をやり、中にそれらの獣と人間がいるのを見つけました。彼等は穴から出ることができませんでした。⁽³⁶⁾ 獣と人間は隠者に穴から引き出してくれるよう口をそろえて頼み、みんなが（引き出してくださったなら）お礼をいたしますと言いました。⁽³⁷⁾ 穴から熊と鳥と蛇を引き出し、人間を引き出そうとすると、蛇が隠者に人間というものは恩を仇で返すから引き出さないようにと言いました。（しかし）隠者は蛇の与えた忠告を信じようとはせず、人間をも穴から引き出してやりました。⁽³⁸⁾ 熊は隠者に蜂蜜のいっぱい詰まった蜂の巣を持って来ました。隠者はその蜂蜜を充分に食べて、ある町へ説教に出かけました。町へ入ろうとした時、鳥が王女の頭から取って来たすばらしい花冠⁽³⁹⁾を隠者に持って来ました。隠者はそれをもらい、たいそう値打ちのある物だったので、とても喜びました。その町では、花冠を見つけて王女にそれをもどした者はだれでも莫大なほうびが与えられるが、もしそれを持っていてもどさなかったならば、きびしく罰せられるだろうと大声でふれ歩いている人に会いました。善良な隠者はある通りへ行きました。そこには金銀細工師であった穴ぐらから助け出してやった男が住んでいました。善良な隠者はその花冠を秘かにその金銀細工師に預けました。細工師はその花冠を宮廷に持って行き、隠者を告発しました。隠者は捕えられて殴られ、牢獄に入れられました。隠者が穴から引き出してやった蛇は眠っている王女の所へ行って手を噛みました。王女は叫び声を上げ、泣き出し、やがて手が非常にはれて来ました。手に毒が廻ってはれている王女の傷をととても悲しんだ王は、王⁽⁴⁰⁾

女を治療した者には莫大なほうびを与えるとのお布令を全市中に出させました。蛇は眠っている王の所にやって来て、王の耳元に、宮廷の牢獄の中には王女を治すことのできる薬草を持った男が捕えられていると王にささやきました。そうして蛇は隠者にその薬草を渡しておき、その薬草を王女の手にはる用法と、たいそう恩知らずの金銀細工師を罰するよう王に頼む方法を教えておきました。こうして蛇の考えたようにすべてのことがうまく運び、隠者は牢獄から釈放され、金銀細工師は罰せられました」〔挿話16終り〕

雄牛が人間に対しのでべた寓話をライオンと全顧問官達はたいそう喜んだ。そうして雄牛に、「余が人間の王を恐れなければならないと思うか」と尋ねた。それに対し、雄牛は人間の王に敵対することは非常に危険なことです、どのような獣もあの邪悪で強力で計略のうまい人間から身を守ることはできませんとライオンに答えた。

雄牛の言った言葉はライオンを非常に考えこませた。そこで狐はライオンが人間の王に恐怖を感じているのを知って、ライオンに次のように言った。「陛下、最も誇り高い獣であると共に、いかなる他の動物よりも貪欲な獣はすなわち人間でござい⁽⁴¹⁾ます。それ故、もし陛下と、陛下の全顧問官がよいとお考えになるならば、人間の王に使者と宝石を贈るのがよろしかろうかと存じます。それは陛下が人間の王に対して持っている恭順の意を陛下の側から相手方へ伝え、陛下の宝石⁽⁴²⁾を贈るためでござい⁽⁴²⁾ます。そうすることによって、人間の王は心中に陛下と陛下の人民に対する愛情を抱かれることでございましょう」

狐の言ったことは、ライオンとその顧問官には非常によい考えのように思われた。しかし、雄鶏はこの意見に反対してこう言った。

〔挿話17〕

「昔ある所で、力と計略が王の前で口論いたしました。そして力は自分は生まれつき計略よりすぐれていると言い、計略は反対のことを申し立てました。そこで王はどちらが正しいかを知りたく思ったので兩人を争わせてみますと、計略が力に勝ちました」〔挿話17終り〕

「それ故、陛下」と雄鶏は言った。「もし陛下が人間の王と友情を結ばれ、陛下が使者を送られるなら、また人間の王も陛下にあちらの使者を送り返して参りましょう。すると、人間の使者は、計略や才能でもって戦い、それを欠いている全ての者共にその計略の力でもって打ち勝つ人間の王から身を守るに足る計略や才能が、陛下にも陛下の貴族にも欠けていることを知ってしまうでしょう」。すると一方狐は言った。「神は行われることのすべてを、力をもってなされるのであり、計略や智略⁽⁴³⁾でもってなされるものではありません。それ故、神の武器に似た武器でもって戦う者は戦闘において当然強くあるはずなのです」

ライオンは狐の寓話を非常に喜んだ、そしてどうにかして人間の王に宝石と使者を送ろうと望んだ。王はまたどのような使者を人間の王に送るべきか、どのような宝石を持って行くべきか助言してくれと求めた。すると狐は雄牛の意見に従われますように、というのは雄牛は人間の間に住んでいた者であり、人間の習慣と人間が最も尊重する者を知っておりますからと進言した。そこ

で王が雄牛に、人間の王に送らなければならない使者と贈物について助言してくれと言うと、雄牛は次のように言った。「陛下、使者を送る時は、その顧問官の中から最も身分の高い者を選んで送るのが人間の王の習慣でございます。そうして陛下の顧問官の間で最も高い身分の方は雪ひょう⁽⁴⁵⁾とひょう⁽⁴⁶⁾であると思われます。また一方では猫は陛下の御姿に似ており、猫と犬を贈物として贈られたならば王もそれをお喜びになるでしょう。猫は陛下に似ているため、(また)犬は人間がとても狩猟を好いているためでございます」

雄牛の助言の如くライオンは行い、雪ひょうとひょうを使者として、犬と猫を贈物として王に送った。使者が宮廷を出発すると、王は雄牛を宮廷の侍従長とし、狐は犬が占めていた職務についた。

〔第41章〕 5. ライオンが人間の王に送った使者について

ライオンは雪ひょうとひょうに使者の趣きの語り方を教えようとし、次のように言った。「主君の知識は、うまく申し述べ、うまく助言し、よく協調する賢明な使者によって現わされるものである。また主君の高貴さは、使者が名誉あり、身分貴い者にふさわしくふるまい、立派な衣装を着用し、その上、よくしつけられよく装備された随員を持ち、貪欲、ぜいたく、強慢、怒り、その他のいかなる悪徳をも持たないことに現わされるものである。これらのことがらや、その他の多くのことがらは、派遣された国の王子や宮廷に使節団が快よく迎えられるよう、使者は身分高い王子の如くふるまうことを必要とするのだ」

ライオンが使者にどのように王の前で話すべきか、またどのように振舞うべきかを話した後、使者は宮廷を出発し、多くのさまざまな土地を通して歩き続けた。使者は長く歩いて、王が議会を持っている都市に着いた。都市の入口では墮落した商売女たちがいて、使者の目の前で男たちと罪を犯していた。使者はたいそう驚き、ひょうは仲間次のように言った。

〔挿話18〕

「ある市民には非常に愛している妻がいました。その市民は、売笑婦の宿に近い建物に住んでいました。市民の妻は男達がいつも女と罪を犯すためにその家へ入って行くのを見ていましたので、みだらなことをしたいという欲望が起きました。そのようにして、その妻は長い間罪を重ねていましたが、ついに夫は妻が1人の男と罪を犯しているのを見つけました。妻の過失に対して夫が怒ると、妻は夫に言いました。『昔、牧場で2匹の野生の牡牛が争っていて、2匹のぶつかりあいで額から多くの血が流れ落ちていました。その血は山羊がたたかっている野原の美しい草の上に滴り落ちました。1匹の狐がそれをなめていましたが、2匹の牡牛はとても怒っていたので狐をまん中にして2匹がぶつかり合い、狐の両脇腹に傷を与えました。その衝撃がとても大きかったので、狐はとうとう死んでしまいましたが、死にぎわに、血のために自分は死ぬことになったと言いました』」〔挿話18終り〕

「ひょう様」と犬は言った。「神を信じる人間が、この都市に出入りする人びとの目の前でこれらの悪い女達が罪を犯すのをこのように放任しておくような良心を持ち合わせているのは驚くべ

きことです。当市の主君と住民が好色であるのは、犬が恥知らずにも情事にふけているのと同じく似ています⁽⁵⁵⁾」犬がこう言いながら、彼等は町に入り、宿屋へ行った。それからひょうと雪ひょうは持って来た贈物を持って王に会見に行った。

王と会見できるまでに長い間使者はその都市に滞在しなければならなかった。⁽⁵⁶⁾というのは、王は自分の偉大さを示すために午後しか姿を見せない習慣であった。⁽⁵⁷⁾ある日、使者は一日中王宮の門の前にいたが謁見を許されなかった。使者達は不平を言い、その宮廷にいることに退屈してしまった。⁽⁵⁸⁾すると長くそこに待っていたが王と話すことのできない腹を立てた男が使者達の目の前で次のように言った。「天と地と、すべての存在物の王である神は謙虚でいらっしゃいます。というのは、人が神に会いたいと望み、その願いごとを申しのべようとする時はいつでも会うことができますし、必要なことを話すこともできます。その王(神)には、袖の下をやらなければならない門番もなければ、不正や虚偽をする顧問官もなく、へつらう者共に信をおかず、強慢で虚栄心が強く食欲で好色、侮辱的な代官⁽⁶⁰⁾や判事⁽⁶¹⁾や大法官⁽⁶²⁾や収税官⁽⁶²⁾もお作りになりません。そのような王と、そのような王を愛し、知り、敬い、仕えるすべての人びとに祝福がありますように！」

その男の言った言葉によって使者達は王が非道な人であることを知った。そこで雪ひょうはひょうに次のように言った。

〔挿話19〕

「ある国王が妻との間の自分の娘を他のある国にとつがせようと思い、婚儀を整えるためにその王の土地へひそかに1人の騎士を送りました。⁽⁶⁴⁾その騎士は農民や町のひとびとにその王の性質を尋ねました。すると人びとはみんな悪く言いました。ある日、たまたまその騎士は宮廷から退出して来た2人の吟遊詩人を見つけました。王は彼等に多くのお金や衣服を与えていたのです。騎士が王の性質を吟遊詩人達に尋ねると、2人は、王は気前がよく、狩りが上手で、よく贈り物をしてくれると⁽⁶⁶⁾言い、他にも多くの同じような言葉を並べて王をほめたたえました。これらの称讃と人びとの王についての非難から、騎士は王が悪い人で悪い性質を持っていることを知りました。騎士がもどって自分の王に聞いたことを申し述べると、王は悪い性質を持つ男に娘をとつがせるのは心配なので、娘をその王に与えるのを望みませんでした」〔挿話19終り〕

⁽⁶⁷⁾使者達が王の御前に入って行き、ライオンが王に贈った贈り物と、主君からの手紙をさし出した。その手紙には次のように書かれてあった。「ある地方に、1人1人が大きい権力を持っている多くの名誉ある貴族を従える国王がいました。そうして、国王は貴族達が王を恐れるよう、またその領土の中に平和と正義を維持するために皇帝と緊密な友情を保持しようとしてつとめました。すると、その良き性質と、王が皇帝に示した友情によって皇帝は国王を非常に愛し、また同じやり方で皇帝の貴族が皇帝にあえて叛逆しないよう友好を保ちました。⁽⁶⁸⁾そのようにしてすべての人たちを支配し、⁽⁶⁹⁾その領土において国王は平和を保ちました。⁽⁷⁰⁾」王はライオンが送った手紙の内容を聞き、贈物を受け取ると、猫は前にいた屑屋に与え、犬は狩猟の好きな1人の騎士に与えた。使者はそれを感じよく思わなかった。それは王が猫を屑屋にやったからであり、ライオンが顔が似て

いるので贈った猫を持つのに屑屋はふさわしい人間でないためであった。

使者の趣きを王に長々と申しのべた後、宿に帰ると、犬が宿にやって来て、王によって自分が騎士に与えられたのはとても不愉快だ、というのも、騎士はライオンの哀れな臣民を狩りこもうと計画しており、現在自分が属している主君に対して不利なことをするよう望まれるからであると言った。⁽⁷³⁾

ある日、王は使者達を招待した。その日には大きな集会が持たれていた。美しい部屋で王と王妃は多くの騎士や貴婦人達と共に食事をし、王の前で使者達も食事をした。王と王妃が食事をしている間、吟遊詩人は歌ったり楽器を鳴らしたりしながら部屋をあちこち歩き廻り、不道徳な、善良な風俗に反する歌を歌った。それらの吟遊詩人達は非難しなければならないことを讃え、讃えなければならないことを非難したが、王も王妃もすべての他の人達もそれらの吟遊詩人達のすることを笑い、楽しんでいた。

王とすべての他の人達が、吟遊詩人がしたり言ったりしていることに興じている時、粗末な衣服を着て長いひげをのばした1人の男がその部屋に入って来て、王と王妃とその他のすべての人達の前で次のように言った。「この部屋で食事をしておられる王様、王妃様、男爵様ならびに大いなる力を持ち、あるいは小さい力をもつその他のすべての貴族の方々は、神が王やその他の方々のテーブルの上にあるすべての被造物をいかにお作りになったかを忘れないようにしていただきたい。神はそれらをさまざまに食べて美味なるようにお作りになり、人びとに役立ち、人が神に役立つようにと、はるかな遠い所からもたらしてくださいました。王様も王妃様もこの部屋にある破れん恥と無秩序を神がお忘れになるとはお考えなさるな。神はきっと恥じていらっしゃることでしょう。それは、ここに非難すべきことを非難する人も、讃えるべきことを讃える人も、神がこの世において王様や王妃様、その他の方々にお与えくださった名誉を神に感謝する人もいないからでございます」善良な男がこれらの言葉を言い終ると、1人の賢明な従士が王の前にひざまずき、この宮廷において讃えなければならないことを讃え、非難すべきことを非難する職務を自分に与えてくださるやうにと王に頼んだ。しかし王は従士のこの希望を許可しなかった。それは、従士が王のいつも行っているあやまちを非難しはしないだろうかと恐れていたからである。王は罪惡の償いは生命の終りの日まで延ばしてもらい、その時まで、誤った行いを続けて行きたかったからである。

従士がそのような職務を与えてくれるやう王に頼み、王がそれを拒否していた時、その都市の代官が王の前に現われ、1人の騎士を誤って殺した男をつれて来た。王は騎士を殺した男に死刑を言い渡すと、その男は王に次のように言った。「陛下、神は人が慈悲を求める時はいつでも赦してください。陛下はこの地上における神の代理人でいらっしゃいますから陛下にお赦しをお願いいたします。神は陛下を赦してくださるのですから、陛下も私に赦免を与えてくださらなければなりません」それに対して王は答えた。「神は正しくして慈悲深い。意識せずにあやまちを犯した者を赦すことは正義である。しかし赦しを求められるだろうと期待して意識的に罪を犯した

者を憐れんで赦すならば、神の正義は憐れみとはならないだろう。さて、お前は余がお前を赦すだろうという希望をもって騎士を殺そうとしたのであるから、赦されるに値いしない」王自身の言った言葉は、従者が王に乞うた職務を王は取り上げなかったが、しかし王が自分自身でそれに反したことを言っていると使者達は知った。

王とその他の人々が食事をすませ部屋から出た後、使者達は宿屋にもどりながら、もし王が賢明で神を恐れるならば、宮廷の高貴さと、王の権力と富は偉大なものだろうと話し合った。使者達が宿屋にもどると、宿屋の主人がひどく泣いているのを知った。「ご主人、どうして泣いてられるのですか、何があったのですか」と使者達は言った。「使者の皆さん、この町に王は国会を持っておられます。国会では遠い所から来た多くの人々のために多くの費用がかかるのです。王の出費が大きいので、この都市に多額の寄附金が割りあてられるのです。私の分だけでも1000⁽⁷⁹⁾ソルにもなりますので、それをユダヤ人から借り入れなければならないのです」と主人の妻は言った。

「ご主人、王は財産を持っていられないのですか」と使者達はたずねた。主人は答えて、王はその臣民から引き出す献上金を除いては何の貯えもなく、毎年2回の国会が開かれるごとに割当てが行われるのです。ところが、その国会のために大きい費用がかかるので臣民は貧乏になり、全王国もまたその費用のため破産してしまったのですと言った。雪ひょうは言った。「王様が毎年開かれる国会からどのような利益が生まれるのですか」。宿の主人は答えて言った。「何の利益もなくむしろ大きな害があるのです。というのは人々はそのために貧しくなり、その貧しさのために多くの嘘といつわりを言わせ、すべての人民は王を憎んでいるのです。王は持っている以上に宮廷にお金を与えて浪費し、一方の人々から取り上げては他方の人々に与えるのです。王が何か新しいことを告示し、何か重要なことを行う時は何も言いません。人々は王を問題にせず、すべての者は王をあざけり、王をばかにしているのです」

使者達は王とすべての人達についてのこのような言葉を聞いて、王とこの土地のすべての人達を軽べつした。そしてひょうは宿の主人に次のように言った。「この土地は大きな被害を受けています。それはこの土地に正義と平和をもたらしすべき者がよい性質を持った君主ではないからです」主人は言った。「ねえあなた、人は悪い君主によって引き起こされる害悪を計り知ることとはとてもできないでしょう。それは第1に行われる悪によって、また次ぎに行うことができるにもかかわらず、行わない善によって計らなければならないのです。そのようにして、すでにあなた方の聞かれたように、悪い君主によって2通りの害が引き起こされるのです。あなた方が派遣されて来たあの王はあまりにも自分の顧問官を信頼しすぎていられるのです。しかし顧問官は邪悪で性質が悪く、またいやしい男達からなりたっているのです。それにその顧問官の各人が国王自身よりも国王らしいと考えており、みんなでそろって王国を食いものにし、一方国王は狩猟や娯楽や色事や虚栄以外には何も心にかけておられないのです」

国王が眠っている時、使者達は国王の宮殿にもどった。しかし門番にわいろを渡さないうちは国王の元へ入って話すことはできなかった。使者達が王の前に伺候すると、王は雪ひょうよりも

ひょうの方に多くの名誉を与えたが、そのため、王はよりにこやかな視線で、よりほほえましい顔付きでひょうを見た。雪ひょうは羨望の気持ちを持ち、王に対し腹を立てた。それは少なくとも王がひょうに与えたと同じ位の名誉を与えられるべきだと信じていたからである。王が使者達と共にいた時、4つの都市が8人の使節を王に送り、それらの都市にいる役人達の不平を言った。役人達は悪人で罪人でありその土地を破壊したと言うのである。8人の使節は全都市の連合の名において、善良な役人を送ってくれるよう王に頼んだ、王はそれらの使節を顧問官の元へ送り、顧問官がお前達の要求を満足させてくれるだろうと言った。8人の使節が王の顧問官の前に出頭し、自分達の要求の趣きを陳述すると、王の顧問官は強く叱責した。その顧問官は4つの都市の役人の中に友人がいて、その友人達は顧問官のために悪事を働いており、不正に手に入れたお金を分配していたからである。8人の使節はこうして王に何の決定もしてもらえずにもどって行った。

ひょうは言った。「陛下、陛下はどのような御返事を私の主人に持ち帰らせてくださいますでしょうか」とすると王はひょうに、王にあいさつし、強い熊と狼を1匹ずつ送るよう言ってくれ、余はとても強い猪を持っているので、見つけられる限りの最も強い熊と戦わせてみたいのだ。また余は1匹のブルドッグを持っているのでライオンの宮廷の中で最も性悪な狼と戦わせてみたいのだと言った。そこで使者達は王にいとま乞いをし、不快な気持ちで宮廷を去った。それは、長い間王に引き止められたのに使者に引出物も与えなければ、主君の王に何の贈物も頼まず、その上、使者達は人間の王が主君のライオンを征服したく思っているように思われたからである。

使者達が自分達の土地へもどる途中に、人間の王とその顧問官達にとっても腹を立て失望しながらもどって来る8人の陳情団の人達と出会った。使者達は陳情団に近づき、王と顧問官達とその軍隊のことを話した。こうしてお互いに王と顧問官についての悪口を言い合った。そこでひょうは陳情団の人達に「あの悪い統治が引き起こす荒廃の責任は王にあると思われますか」と尋ねた。8人の陳情団のうちのある人は答えて次のように言った。

〔挿話18〕

「ある町に非常に金持ちの市民がいました。死ぬ時、自分のすべての財産を子供に残しました。その市民の息子の所へ多くの人々がおせっかいにやって来て、ある者は妻を持ちなさいとすすめ、ある者は宗門に入れと言いました。しかしその若者は持っている物を全部売り払い、1軒の宿泊所⁽⁷⁾と1つの橋を作る決心をしました。宿泊所は、遠い外国からやって来て、その町を通る巡礼の人々を泊めるためのものであり、橋は巡礼達が渡って、水に溺れなくするためのものでした。川が町の入口にあり、エルサレムへ往き来する多くの巡礼がそこで溺れていたからです。市民の息子が宿泊所と橋を作り終え、ある夜、眠っていると、宿泊所と橋を作った善行により、自分が神に喜ばれて天に引き上げられた夢を見ました」〔挿話18終り〕

ひょうはこれらの言葉を聞いて、悪い顧問官達がこの土地で行っている悪行が、いつも引き起こす荒廃の大きさと同じ程度の苦しみを、王は地獄で苦しむことになるだろうと理解した。そし

て王と顧問官達の受ける罰は同じものであり、人間の王ではあるが、悪い王の引き起こす悪行の罪の深さよりも、たとえ死後の希望はないにしても、理性のない獣の方がずっとましだと心の中で言うのだった。使者達と陳情団の人々は気持ちよく別れを告げた。ひょうは陳情団の人々に、神により頼みなさい。すぐによい顧問官をおき、よい役人を送ってくれる善良な主君を与えてくださることでしょう。神に望みを失ってはいけません。神は悪い君主が長く地上におれば引き起こす悪の大きさを考え、長く生かしておくような我慢をとてもおできにならないでしょうと言った。

ライオンが人間の王に使節と贈物を送った最初の頃、王の門衛であった狐はひょうが世界で最も美しい獣を妻として持っていると言った。狐が雌ひょうのことをあまりにほめそやしたので、王は雌ひょうに恋慕し、王妃や全顧問官に反対して雌ひょうを妃とした。顧問官達は、善良な王妃や忠実な家来であるひょうに国王が敵対するというような大きな過ちを狐が王に犯させたのを見て、非常に狐を恐れた。雄牛は狐に言った。「友よ、王に妻を奪わせたあなたの隠謀を知った時、ひょうはわれわれを殺さないだろうか。とても恐しいのだ」。すると狐は雄牛に次のように言った。

〔挿話19〕

「昔、おつきの小間使いが主人の王妃を裏切りました。しかし王はたいそう小間使いを寵愛していたので、その寵愛故に王妃はその小間使いを恐れ、王への恐れ故に小間使いにあえて復しゅうしようとはしませんでした」〔挿話19終り〕

使者達もどり、使節の結果を報告して、ひょうはとても愛していた妻に会おうと自分の家へ帰った。ひょうの家に仕えていたイタチやその他のすべての者は、自分達の主人を見てとても悲しんだ。そして、王がひょうの妻をむりやり連れ去った時の侮辱をひょうに語った。ひょうはとても驚いて王に腹を立て、妻が王に連れて行かれた時、妻は悲しんでいたか、それとも喜んでいのかとイタチに尋ねた。イタチは言った。「御主人様、奥様はライオンと共にいる時、とても悲しんでおられ、長い間泣いていらっしやいました。そしてあなた様と離れるのをとても嘆いていらっしやいました。それは誰よりもあなた様を愛していられたからでございます」。妻がむりやりに王のもとに連れて行かれたことを知り、ひょうの怒りはますます大きくなった。もし妻が進んで行ったのならこれほどその不愉快さは大きくなかったであろう。そのようにとても腹を立てていたひょうは、こんなにひどい裏切りを自分にしたライオンにどうすれば復しゅうできるかを考えた。

〔第42章〕 6. ひょうと雪ひょうの戦について

ひょうが王の宮廷に現われた。そして、狐はひょうが来たのを見て、こっそりと王に次のように言った。「陛下、陛下と雌ひょうの結婚によってひょうを怒らせてしまいました。ひょうを前にして、もし陛下が私に名誉を与えず、他のだれよりも近く私を置いてくださらないならば、きっとひょうは私を殺してしまうことでしょう」。そこでライオンは狐を顧問官の中に入れ、自分の近

くにおいたのでひょうは狐を傷つけることも殺すこともできなかった。そうしてまた狐のすすめに従って門衛の役目にとても嗅覚のするどい孔雀を任命した。しかし、王のすべての顧問官と、その広場にいたすべての貴族は王が狐に与えた名誉を不快に思った。自分の妻と国王との結婚の原因を狐が作ったのだと知らされていたひょうは特に不快に思った。

ひょうは王の前に出頭した。そうして、多くの身分の高い貴族を前にして、ひょうは王に裏切りを非難し、王は詐術をもって自分の妻をうばったと言い、もし宮廷の中に王の裏切りを正当化しようと思う貴族があるならば、その者と闘い、王は裏切り者であると宣言するだろうと言った。そうしてひょうは決闘を確認するため⁽⁷⁹⁾ 抵当を国王に渡した。ひょうがすべての人びとの前で王の裏切りを非難したので、王はひょうに対しとても腹を立て、裏切り者と呼ばれたので人びとに対し大きな恥をかいたと感じた。王は貴族達に言った。「貴殿方の中でだれか余を裏切り者と呼んだひょうと闘ってくれるのか」⁽⁸⁰⁾。すべての貴族は口をつぐんだので、狐は次のように言った。「裏切りは神が最も不快に思われることです。また自分の主君が裏切り者と呼ばれることは王のすべての人民にとって大きな不名誉です。それ故、ひょうは自分の主君に大きな不名誉を与えたことになります。そして不名誉を与えたために生命の危険に自からを陥入れたのです。それ故、王の不名誉をそそぐ善良な貴族はだれでも名誉ある行為をしたと言うべきでしょう。そうして名誉を守るために戦った者は王から大きなほうびを受け取れることでしょう」。ひょうが裏切り者と非難した時、王がこうむった大きな不名誉をそそぐため、また人間の王が自分よりもひょうの方に多くの名誉を与えたのを快よく思っていなかったので、雪ひょうが決闘を受けて立ち、王の裏切りの不名誉をそそぐことになった。しかし、国王が悪事を働いたのであり、一生の間忠実に仕えたひょうに対し裏切りを行ったことを知っていたので良心は痛んだ。

ひょうと雪ひょうは野原へ行った。すべての人びとは「さあ真実が勝つか虚偽が勝つか見てみようじゃないか」と言った。その時、鶏は蛇にどちらが決闘に勝つと思うかねと尋ねると、蛇は次のように言った。「決闘は真実が虚偽を混乱させ、破壊するために行われるのだ。そうして、神は真実である故に虚偽を弁護する者はすべて神と真実に対抗して闘うわけだ」。蛇が鶏にそっと言ったその言葉をひょうと雪ひょうは共い聞いた。そして、その言葉はひょうにとって非常に慰めになったが、雪ひょうにとっては、王の罪が自分の不名誉と死の原因になるのではないかと恐れ、心配と悲しみに襲われた。

ひょうと雪ひょうの決闘はその日一日中、夜の勤行の時間まで続いた。⁽⁸¹⁾ そして雪ひょうはとても勇敢にひょうに対して身を守り、ひょうにもう少しで勝ち、殺すところだった。しかし、良心の痛みが勇気をくじけさせた。一方、王に対して持っていた道理と怒りがひょうを元気づけ、気力の衰えから立ち直らせた。自分は正しく、決して敗北はありえないという希望によってひょうはとても強く闘った。とうとう雪ひょうは敗れ、宮廷の人々全部の前で、自分の主君である王は偽わり者で裏切り者であることを認めた。⁽⁸²⁾ 王はその戦いの結果に混乱し、辱しめを受けた。そうして、ひょうが雪ひょうを殺したので、すべての人民も自分達の主君の不名誉を恥かしく思った。

人民の前で王はあまりにも大きい恥辱を受けて混乱し、大きい不名誉を与えたひょうに対する怒りがあまりにも大きかったので、すべての者の目の前でひょうを殺した。とても疲れ果てていたのでひょうはライオンから身を守ることができなかったのである。王宮前の広場にいたすべての者は王の犯した過ちに失望した。そうしてみんなが、このように他人を侮辱し、怒りっぽく、裏切者の王の下に仕えて生きることは危険なので、他の主君の領土に行って暮らしたいものと思った。

王はその夜、一晩中大きな悲しみと絶望にとらわれた。次の日の朝、王は顧問官を呼び集め、人間の王が1匹の熊と1匹の狼を送れと言って来たことについて意見を求めた。王の最も賢明な顧問官である蛇は言った。「陛下、陛下の土地には多くの熊と狼がおります。その中から、お気に召すままに送りたい熊と狼を選ぶことがおできになります」。また一方では狐が人間の王は世界中で最も高貴で強力な王ですと言った。「それ故、陛下、陛下は国中で最も賢明であり、しかも最も強い熊や狼を送らなければなりません。そうしなければ非難され、危険に陥ることでしょう」⁽⁸³⁾。王は狐にこの王国内の最も賢明で、しかも最も強い熊や狼は誰かと尋ねた。すると狐は答えて、王の顧問官である熊や狼が、王国のいかなる熊やいかなる狼よりも賢明で強いものと思われまうと言った。

王は顧問団の中にいる熊と狼を送ることを受け入れた。しかし、熊も狼もあえて逃がれようとはしなかった。それは2匹とも名誉を愛し、もし逃がれようとするれば、臆病だと思われはしないかと怖れたからである。そこで狐は、全王国の中で最も高貴な人物を人間の王に送りたいのならば、全宮廷の中で最も賢明な使節が、熊と狼を贈物としてたずさえなければならないと国王に言った。王はその提案を受け入れ、蛇を使節に任命した。

蛇は王の宮廷から使節として出て行く前に次のように言った。

〔挿話20〕

「昔、1匹の狐が美しい牧場ではらわたを見つけました。しかしそのはらわたの中には狩人が狐を捕えるために入れておいた釣針が隠されていました。狐はそのはらわたを見ると、手を触れようとはせず、『はらわたが、何のたくらみも危険もなしにこの牧場に置かれているはずがない』と言いました」〔挿話20終り〕

ライオンは罪を犯し、ひょうを殺した後は、従前持っていたような鋭敏さもずる賢さもなくなっていたので、蛇の言った言葉の意味を理解できなかった。そこで、よくわからないからその言葉の意味を説明してくれと蛇に頼んだ。蛇は、⁽⁸⁴⁾雄牛と狐が宮廷に入ってから宮廷には苦しみや悲しみばかりです。だから王と宮廷の苦しみと悲しみの原因はライオンが雄牛と狐に対して与えた名誉に他なりませんと答えた。

蛇が王を非難した言葉を聞いた雄牛は、私は王に対し何ら悪意を抱いたこともなければ、⁽⁸⁵⁾王やその宮廷に対して悪い振舞いをする理由も何もない。王は事実自分に名誉を与えてくださったのだし、その上、王の餌食になっても仕方のない身なのに王は私を食べようとはされなかった。だ

から私は尊敬の念をもって王に身を捧げ仕えなければなりませんと、全宮廷の人びとの前で王に申し開きをした。そしてまた、雄牛はいろいろと言葉をつくして王に言い訳をし、狐が自分に夜3回、昼3回吠えるように、また、王に大きな利益をもたらすから自分にも宮廷に入れとすすめてくれたのだと言った。

このように雄牛が王に言い訳をしたので、狐は不愉快に思い、雄牛に対して悪い心を抱いた。雪がひどく降って、とても寒かったある日、ライオンも宮廷の者達も何も食べ物が見つからず、空腹に苦しんだ。ライオンは狐に何か食べ物を持って来ることができるかと尋ねた。狐は私は何も知りませんが、孔雀の所へ行って、そちらの方に王とその仲間の方々が食べられるような獣が何かあるかどうか尋ねましょうと答えた。狐が近づいて来るのを見た孔雀はとても恐れた。狐をととてもこわがっていたからである。狐は、王様がもし食べられる獣が何かあるかとお尋ねになったなら、王様がお上がりになるような獣は何も存じません。しかし雄牛の息がくさく、すぐに病気で死んでしまうだろうと思いますとライオンに答えてくれと言った。孔雀は狐をこわがっていたし、また自分が食べるべき小麦を雄牛が食べるので、雄牛の死に同意し、狐に言われた通りライオンに言った。

ライオンが孔雀に何か食べ物があるかと尋ねると、孔雀は、何も存じませんが、腐った悪い息のにおいから判断すれば雄牛はやがて死ぬものと思いますとライオンに言った。ライオンは雄牛を食べたいという気を起こしたが、雄牛に安全を保証しており、また雄牛も長い間よく仕え、自分を信頼していたので、殺すことは良心にとがめた。王が雄牛を食べることにまだ迷っているのを見て、狐は王に近づき、どうして雄牛をお食べにならないのですか、孔雀の言うところによれば雄牛はすぐにも病気で死んでしまうでしょうし、また王が必要な時はいつでも臣下の奉仕を要求することを神は認めていらっしゃるのですよと言った。ライオンは狐に答えて、雄牛に対して約束した保証を破りたくはないのだと言った。狐は言った。「陛下、もし私が雄牛に自分から食べてくださいと言わせ、雄牛の方から陛下が約束した保証を解消するなら陛下はお食べになりますか」。ライオンはもちろん食べると約束した。

そこで狐はとても腹をすかせている鳥の所へ行こうと言った。「ライオンは腹をすかしていられます。とてもよく肥えていて、それに大きい獣なので、我々全員に充分肉を配れる雄牛を殺そうと考えています。だからもしライオンがあなたの前で腹がへったと言ったなら、あなたは自分自身の体をささげ、私を食べてくださいと言いなさい。そうしてもライオンは決してあなたを食べるようなことはありません。それは私が反対するからです。そして私が言うことは常に私の言葉通りに従ってくれるからです。そして私が自分を食べてくれるよう王にわが身を提供した時は、私はよい食べ物ではない、私の肉は健康に悪いと言ってください」

狐はこのように鳥に教えてから、雄牛の所へ行き、孔雀がお前の息がくさくすぐに病気で死んでしまうだろうと言ったので、王がお前を食べたがっていると言った。雄牛はとてもこわがって、お百姓が雄馬に言った言葉はほんとうだったと言った。「それはどんなことかね」と狐が言うと、雄牛は次のように言った。

〔挿話21〕

「ある金持ちの農民が地位を手に入れたく思い、その農民の富をほしがった1人の騎士に娘を妻として与えました。騎士にとっては名誉が富に変わったのです。しかし地位を持っていないこの農民にとっては、富は大きな力を持つことができませんでした。しかし騎士の地位は農民の富を引きつけました。そこで、農民は貧乏になって地位を得られず、騎士は金持ちになって地位も保ちました。そこで農民は、騎士と農民が仲良くすれば、農民には貧しさと苦勞が、騎士には地位をもたらすものだ」と騎士に言いました。〔挿話21終り〕

このように牛とライオンが仲良くすれば、雄牛には死が、ライオンには満足がもたらされるでしょう」と雄牛は言った。狐は雄牛に、ライオンは安全保証の約束をしたのだから裏切らないだろうと言い、もし必要ならば私をお食べくださいとライオンに我が身を捧げた方がいいだろうとすすめ、そうすればライオンはとても喜んで、感謝の喜びと、約束した負い目から、決して悪いようにはしたいだろうと言った。そしてつけ加えて、「それに、ライオンがお前に卑劣な行偽や害悪を与えないよう私もお前を助けるよ」と言った。

狐はすべてのことをうまく準備し終えると、雄牛と鳥をつれてライオンの前にやって来た。そして鳥はライオンの前に進み出て、ライオンがおなかをへらしていただけることを知っているの、どうぞ私を食べてくださいと言った。狐は口を開いて鳥には王が食用にするにふさわしい肉はないと説明した。こう言った後、狐は王に私を食べてください、私自身より他に食物としてさし上げる物がありませんのでと言った。すると鳥は狐の肉を食べると健康によくありませんとライオンに言った。この時、雄牛は同じような言葉をライオンに言い、自分は大きくてよく肥えており、食用に適した肉を持っているのでライオンに食べて頂きたいと言った。するとライオンは雄牛を殺し、王と狐と鳥は腹一杯になるまで雄牛を食べた。

雄牛が死んだ後、ライオンは雄鶏と狐に誰を侍従にすべきかと尋ねた。雄鶏が先ず口を開こうとしたが、狐が怒った顔付きで雄鶏をにらんだので、雄鶏は狐が話すまで口を開こうとはしなかった。狐は、兎が人好きのする顔をしており、謙虚な獣なので、猫と雄牛が占めていた職務をつぐのにふさわしいでしょうと王に言った。ライオンが雄鶏に尋ねると、雄鶏は狐をととても恐れていたの、狐が助言したことにあえて反対しようとはせず、狐が助言したのと同じことを王に助言した。ライオンは兎を侍従に任命し、狐は宮廷でとても大きい権力を握った。それというのも、雄鶏も孔雀も兎も狐を恐れていたし、ライオンは狐の言うことはすべて信用していたからである。

ある日、王は王国内に起こったある大事件を決定する必要があったので、雄鶏と狐に助言を求めた。鶏は他の仲間なしに大きい問題を自分達だけで解決するのは不充分であると言い、顧問官の中から蛇とひょうと雪ひょうと狼が欠けて以来、今あるような小さい顧問団を持つことは不名誉なので、顧問官の数をふやすよう国王に助言した。顧問官をふやすというこの考えは王には適当と思われたが、狐は次のように言って反対した。

〔挿話22〕

「ある所に、神様から多くの知識を与えられ、獣や鳥の言うことをすべて理解できる男がいました。しかし獣や鳥から聞き理解したことを誰にも決して言うてはいけなし、もしそれを言えば、その日のうちに死ぬという条件で神はその男に才能を与えていたのです。〔挿話23〕この男は畑を持っており、そこでは雄牛が水車で水を汲み上げ、ろばが畑に施肥するために堆肥を運んでいました。ある夜、雄牛が非常に疲れていました。すると、ろばは今夜は大麦を食べないように、そうすれば次の朝、男は雄牛は水車を引かせず休ませてくれるだろうと教えました。雄牛はろばの教えに従い、その夜は大麦を食べませんでした。お百姓は雄牛が病気なのを知ると、その代わりにろばに水車を引かせました。その日1日中ろばはひどく苦しみながら水車を回しました。夜になり家畜小屋に帰ると、そこでは雄牛が横になって休んでいました。ろばは雄牛の前で涙を流し、『主人は肉屋を呼ぼうとしていますよ。君が病気なので君を殺そうとしているのです。元の仕事にもどり、病気のふりをやめた方がいいですよ』と言った。⁽⁸⁷⁾人間が二度とろばを水車場に連れていかないように、ろばはこう言ったのです。水車の仕事は堆肥を運ぶよりろばにとってずっとつらい仕事だったのです。雄牛は殺されるのが恐いのでその夜は大麦を食べ、治ったふりをしました。〔挿話23終り〕雄牛とろばの持ち主の男は雄牛とろばの話がわかりましたので、2匹の会話を聞いて妻の前で笑いました。その男の妻は夫が何を笑ったのかを知りたく思いましたが、男は言おうとはしませんでした。妻は、夫がもし言ってくれないのなら、食事もせず、水も飲まず、また死んでもかまわないと言いました。その日とその夜ずっとその悪い妻は食べも飲みもしようともしませんでした。妻をとて愛していた夫は、そのわけを言ってやろうと言い、遺言書を認めました。遺書を書いた後、笑った理由を妻に言おうとしました。しかし、その時、犬が雄鶏に言ったことと、雄鶏が犬に答えたことを耳にしました」

「それはどんな話か」とライオンは狐に尋ねた。狐はライオンに次のように語った。

「その男が遺書を作っている時、雄鶏は時を告げました。すると犬は、自分達の主人が死ななければならないのに歌を歌うとはといって、歌っている雄鶏を叱りました。雄鶏は犬が自分の歌を非難したのでとても驚きました。そこで犬は、主人は死ななければならないし、妻の命を助けるために死のうとしてしていると話しました。雄鶏は答えて、1人の女の主人にもなれないような気の弱い男は死んでも仕方がないと答えました。そして雄鶏は、自分の持っている10羽の雌鶏を呼び集め、彼女らを1個所に集めて、好きなように動かしました。そのようにして犬に主人が死んでも仕方がないと納得させたのです。2匹は共に納得し、雄鶏は歌い、犬は陽気に走り回りました。犬は雄鶏に言いました。『仲間よ、もし君がぼく達の主人のように頭の弱い妻を持っており、ぼく達の主人に起こったように、死ななければならないようなことが起こればどうするかね』すると雄鶏は、もし自分が主人だったら、畑にあるざくろの枝がみんな折れ、妻が飲み食いを始めるまで妻を打ちすえるか、それとも餓えと渇きで妻が死ぬまで捨てておくよと言いました。男は犬と雄鶏が言っている言葉を聞くと、ベッドから起き上がり、雄鶏が教えてくれた通りに実行しました。そして妻は充分たたかれて、食事をし、夫が命じたことは何でもするようになりまし

た」〔挿話22終り〕

狐はこの寓話を語り終え、雄鶏はとても賢明なので、あらゆる場合に助言をすることができるので、王は顧問官をふやす必要はございません。特に顧問官の数が多いと、結果や意見や意図がさまざまに分かれ、そのためにしばしば君主の顧問団が混乱するものでございますと言った。

狐がこう言うと、雄鶏は次のように言った。

〔挿話24〕

「1羽のおうむが鳥と共に木の上にいました。木の下では1匹の猿がいて螢を火だと思い、たき木を近づけて火をつけ、温まろうと息を吹きかけていました。おうむは猿に叫び、それは火ではなくて螢だと言いました。鳥はおうむに人の教えも誤りの矯正をも受け入れない者に罰を与えたり教えたりしないようにと言いました。何度も何度もおうむは猿に火だと思っている物は螢であって火ではないと言い、その度に鳥は生まれつき曲がっている物をまっすぐしようとするようなものだと言ってとがめました。ついにおうむは⁽³⁵⁾木から降りて自分が猿をたしなめていることをもっとよく猿にわからせようとして猿に近づいて行きました。しかしおうむが猿に近づくとすぐ、猿はおうむを捕え殺してしまいました。」〔挿話24終り〕

雄鶏がこの寓話を語った時、王は自分のことを言っているのだと思い、残忍な顔つきで雄鶏をにらみ、よくない意図を顔に現わした。そこで狐は雄鶏を捕えて殺し、王の前で食べてしまった。

狐がただ一匹の王の顧問官となり、兎が侍従に、孔雀が門衛に残っただけなので、狐は権力の絶頂に上り、王に対し好きなように行動した。そうして狐がこの絶頂にある時に、心中に抱いていた王に対する叛逆を思い出し、王が死んだ時はあなたを王にしようと思っていると象に言った。狐は今の状態を喜んではいたが、象が（陰謀を）暴露しないだろうかと恐れ、象との約束を果たすため、王の死をはかろうとした。

〔第42章終り〕

〈注〉

(35) 原語 *ciga*(*silo*(西)), イスパニア語訳では *gran sima*(大きい穴), フランス語訳では *fosse*(わな)。

(36) この1節はイスパニア語訳にはない。

(37) イスパニア語訳では「一生あなたに感謝いたしますと言いました」

(38) イスパニア語訳では、この1節の前に「それから少したって」の語がある。

(39) 原語 *garlanda*, イスパニア語訳も *guirnalda*, フランス語訳だけは *chapeau*で *guirlande* を使っていない。

(40) この1節はイスパニア語訳にはない。

(41) この1節はイスパニア語訳で「最も誇り高い獣は他のいかなる動物よりもずっと貪慾な獣であります。それが人間でございます」となっている。

(42) 原語 *joyes*(*joyas*(西)), フランス語も *joyaulz* となっているが、イスパニア語訳では *presentes*(贈物) となっている。

(43) イスパニア語訳、フランス語訳ではこの間に「神の武器と似ていない武器で闘う者よりも」の1節がある。

(44) イスパニア語訳ではこの1節は簡単に「そこで王が雄牛にそのことを尋ねると」となっている。

(45) イスパニア語訳では誤って *tigre*(虎) と訳されている。

- (46) 「また1方では…」以下のカタロニア語の原文は少し舌足らずである。そのためか、イスパニア語訳、フランス語訳共に文章を整理し手を加えている。フランス語訳では、「また1方猫は陛下のお姿に似ており、人間の王も、陛下が猫を贈物として贈られるならば、姿が似ているので喜ばれることでしょう。そして犬は狩のために送られるべきです。人間はとても狩猟が好きですから」。イスパニア語訳では「そしてまた贈物としては、あなたに似ているから猫を、人間は狩が大好きだから犬をつれて行くべきでしょう」。
- (47) イスパニア語訳では冒頭に「使者が出発する前に」の1節がある。
- (48) 原語 *honradamente massió* より正確には「身分にふさわしくお金を使い」である。イスパニア語訳では誤訳して「家を整え」としている。
- (49) フランス語訳でこの語の前に *guele*(*guile* 欺瞞)がある。
- (50) このライオンの言葉に中世欧州における君主の使節の道徳的ならびに外見的な必要条件が現わされている。
- (51) イスパニア語訳では「自分の体と魂を失い、他人の体と魂をこわして生計をたてている女」となっている。
- (52) 原語 *bous*[写本Aによる]、写本Bは*boucs* (山羊)となり、イスパニア語訳、フランス語訳は共に写本Bによって、それぞれ*machos de cabrió*(牡山羊)、*boucs sauvages*(野生の牡山羊)となっている。
- (53) 原語 *volp* で *Na Renard* ではなく、一般的な狐を指し、物語の主人公の狐ではない。
- (54) この寓話の意味は必ずしも明らかではない。しかし、そんな場所に住んだ夫に責任を帰すべきだという意味かも知れない。
- (55) このたとは犬自身の言葉としては不隠当である。
- (56) この1節はイスパニア語訳では「しかし彼等はそれができなかった」となっている。
- (57) イスパニア語訳、フランス語訳は「そんなにしばしば姿を見せない」となっており、より適切な表現である。
- (58) これは多分リュイの個人的な経験であろう。彼はアラゴン王の大使としてフランスのフィリップ王に会いに行ったが、王はボワシーで病臥しており、リュイはフランスの宮廷で長く王との会見を待たなければならなかったと言われている。
- (59) フランス語訳にはこの後に「愛想がよい」が加わっている。
- (60) 原語 *veguers*、カタロニアにおいて王に任命された *veguer* は治安、警察、軍事、犯罪者の逮捕等を職務とするある地方全体の司法、軍事の両面を担当した。
- (61) 原語 *batlles* (*bailes*[西])、カタロニアの *batlle* も始めはフランスの *bailli* と同じように私的な経済行政官であったものが、時代と共に司法権をもあわせ持つ官吏となった。
- (62) 原語 *precuradors* (*procuradores*[西]) 検事の意味もあろうが、ここでは地方収税官であろう。
- (63) 原語 *injuríós*、イスパニア語では *injurioso* (好色的な) となっている。
- (64) イスパニア語訳ではこの間に「都市に入るとすぐ」の句をおいている。
- (65) 原語 *als pegeses e al pobre*、イスパニア語訳では *a los pasajeros* (通行人に) としている。
- (66) 原語 *amador de doves*、イスパニア語訳では *enamorado*(恋をする) となっている。
- (67) イスパニア語訳では冒頭に「この議論があつて少し後」がつけ加えられている。
- (68) 「また王の貴族が皇帝に叛逆しないよう」の1句がイスパニア語訳でつけ加えられている。
- (69) 原語 *plans* (*dominados*[西])、イスパニア語訳は *contentos* (満足し) と誤訳している。
- (70) イスパニア語訳では「平和と正義を」
- (71) 原語 *draper* (*trapero*[西])、イスパニア語訳では *ropero* (衣裳係) と誤訳している。
- (72) イスパニア語にこの1節はない。
- (73) 「というのも」以下はイスパニア語訳で、「騎士はライオンの小さい臣民を狩り出し、追い回そうとしており、自分もそれを手伝わされるからであると言った」となっている。
- (74) イスパニア語訳にはこの1節はない。
- (75) 原語 *sols*、カタロニアの貨幣単位。
- (76) 教会が信者に利子を取ることを禁じていたので、ユダヤ人は中世唯一の金融業者であった。
- (77) 原語 *espital* (*hospital*[西])、中世において、貧民や巡礼、旅行者を宿泊させる施設。リュイはこの施設の重要性を「ブランケルナの書」9、10章においてものべている。
- (78) 原語 *mustela* (*mostela*[西])、このあとにイスパニア語訳では *hurón* (白いたち) を付け加えている。
- (79) 中世、決闘をしようとする者は、敗れた場合支払わなければならない罰金を保証するための抵当物を主君に提出しておかなければならなかった。
- (80) この1節以下、狐の長い発言はすべてイスパニア語訳では省略されている。
- (81) 原文 *hora de completa* (*hora de completas*[西]) 教会で行われる最後のお祈りの時間。

- (82) この1節はフランス語訳にはない。
- (83) 「そうしなければ」以後の1節はイスパニア語訳にはない。
- (84) この次に「狐の助言は悪い意図や虚偽なしにしたものではありません」がイスパニア語訳には挿入されている。
- (85) 以下7行の雄牛の言葉はイスパニア語訳にはない。
- (86) 以下の1節はイスパニア語訳にはない。
- (87) 以下の4行はイスパニア語訳にはない。
- (88) 原語magraner(*granado*[西])、中世フランスの北部ではざくろは知られていなかったので、フランス語訳は木の名前を省略している。
- (89) イスパニア語訳ではこの間に「自分の言葉が木の上からでは不充分だと思って」が挿入されている。